

→わが国初の譲位と重祚—皇極(斉明)女帝をめぐる王族たち

2018.9.9(日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第538回 参加報告

皇極天皇となった竇女王は忙しい。645年7月10日・11日「乙巳の変」で、蘇我蝦夷・入鹿が倒れ、蘇我本總家が滅びると、7月14日にわが国で初めての譲位を行い、同母弟の軽皇子を孝徳天皇とし、自らは皇祖母尊(すめみやのみこと)となる。皇太子は中大兄皇子で、同年7月17日に初めて元号を立て「大化元年6月19日(645年7月17日)」とする。元号が立てられるまでは皇極天皇4年である。そして「大化改新」という各分野での制度改革が行われていく。

そのうえ、高句麗・新羅・百済が度々使者を送って来、外交も多忙であった。一連の動きに、皇祖母も率先して動いていたと思われる。



車木公民館へ向う道中

しかし皇祖母尊は、立太子した中大兄皇子らとともに孝徳天皇を残し、難波宮から飛鳥河辺行宮へ帰ってしまう。京遷りに意見の相違があったというが、これも謎である。孝徳帝は神道を軽んじ、儒者を好んだ、とあり、孝徳帝と、皇祖母尊・中大兄皇子は考え方や政治方針が大きく違ったのかもしれない。やがて在位10年あまりで孝徳帝は崩御し、彼の



車木公民館にて田中先生の講義

一人息子・有間皇子も「天與赤兄知 吾全不知」(天と蘇我赤兄のみ與り知る 私は全く知らず)と謀反の疑いを掛けられて藤白坂で処刑されたのは有名な話だ。蘇我本総家を一扫したものの、蘇我氏系の豪族を重用し、高向玄理(黒麻呂)や僧・旻(みん)ら国博士を軽んじた孝徳天皇を気鬱にし、重祚して斉明天皇となった竇女王。実は、蘇我一族を排斥し、親政を実現しようとする彼女の力が大いに働いていたのではないかと……。

その後、『日本書紀』や『扶桑略記』に、斉明天皇の後世の印象を決定づける怪異な記述がみられる。推古天皇によって6歳で巫女になって神に仕えた竇女王。「天皇が天を仰いで祈ると雷鳴がして雨が降り、5日間も続いて天下は等しく潤った」のは、その霊力か。また斉明天皇として重祚してからは、即位の様子を空に「空中に龍に乗れる者在り」、また葬送時には「鬼有りて、大笠を着て、喪の儀を臨き視る」とある。『扶桑略記』には鬼は蘇我豊浦大臣の霊とあるから蘇我蝦夷のことで、彼の怨霊が付き纏う。そして、しばしば興事(お

こしつくること)を好み、水工(みずたくみ)に溝を掘らせて労役の重さや公糧を損なったりし、「狂心(たぶれごころ)」と非難したのは蘇我赤兄であったが、天皇は、国内は蝦夷国征伐に行かせたり、新羅との戦を避けようと交渉、内政外患に忙しい。結局「白村江の戦い」は中大兄皇子に引き継がれるが、斉明天皇は筑紫までは行っている。



光雲禅寺の銀杏

違う側面を見せるのが、斉明天皇の抒情歌だと、田中先生は史学者の北山茂夫氏の説を借りて紹介された。「今城なる小丘(おむれ)が上に雲だにも著(しる)しく立たばなにか嘆かむ」「飛鳥川漲(みなぎら)ひつつ行く水の間(あいだ)も無くも思ほゆるかも」、「山越えて海渡るともおもしろき今城の中は忘らゆましじ」「愛しき吾が若き子を置きて行かむ」中大兄皇子の息子・建王が8歳で夭折した時に詠った歌だ。皇子は生まれながらに話すことが不自由で、天皇は愛を注いだ。



光雲禅寺

越智岡上陵を下りて、土佐街道の街路を光雲寺へと進む。黄檗宗の禅寺で、境内に「元雅の魂のさまよう越智の里」という梅原孟氏の歌碑がある。元雅は観世三世、世阿弥の後継者で、この禅寺の壇越・越智氏は観世元雅のスポンサーでもあったのか。門前に樹齢1000年に近い杉の木がある。越智一族の鳥屋陣羽守の息子二人が筒井順慶に攻められた時、追っ手をのがれて杉の木に登り難を逃れた。この時、二人が42歳と25歳の厄年で助かったので、以来、厄除けの杉とされている、と説明板にあった。越智氏の氏神有南神社、越智氏が天手力男命を守護神として祀ったという天津石戸別神社に立ち寄り、蘇我川を西へ渡るとそこは、役行者ゆかりの地である。希望者のみの拝観だったが、殆どの方がその生誕地とされている吉祥草寺を訪れられたようだ。



天津石門別神社

<報告：田淵浩一>